The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「世直し」ノオト（2020年度・夏）
Author(s)	池田, 光穂; 岡野, 彩子; 上條, 美代子 他
Citation	Co＊Design. 2021, 9, p. 47-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78965
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「世直し」ノオト（2020年度・夏）

池田光穂（大阪大学COデザインセンター）
岡野彩子（大阪大学COデザインセンター）
上條美代子（看護師）
北村敏泰（ジャーナリスト）
熊野以素（日本社会保障法学会）
滝奈々子（京都市立芸術大学芸術資源センター非常勤研究員）
日髙悠登（龍谷大学世界仏教文化研究センター）
※所属・肩書は投稿日（2020年7月31日）現在

“Yonaoshi” Note (Summer semester 2020)

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Ayako Okano (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Miyoko Kamijo (Nurse)
Toshihiro Kitamura (Journalist)
Iso Kumano (Japan Association of Social Security Low)
Nanako Taki (Visiting researcher, Archival Research Center, Kyoto City University of Art)
Yuto Hitaka (Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University)

キーワード ―― 世直し、対話、行為、コロナ禍
Keyword ―― Yonaoshi, dialogue, action, coronavirus crisis

このノオトは、2018年4月25日に誕生した「世直し研究会」に集う大学内外の参加者が、研究会での対話をもとに考えて綴った「ノオト（notes）」の第5弾です。「世直し研究会」は、2006年4月から2016年3月まで大阪大学コミュニケーションデザインセンターにおいて開催された「現場力研究会」の後継組織として発足し、通算で195回を数えます。月1回水曜日に大阪大学COデザインセンターで開催され、世の中の理不尽や不条理から目を逸らすことなく、「世」のあるべき姿を問いつつ、具体的な現場での課題に取り組む力を養い、「世直し」へと繋げていくことがこの研究会では目指されています。

今回は、第21回から第25回までの研究会（2020年2月～同年7月）における対話から編み出された7編のエッセイをご紹介します。この期間に取り上げたテーマは以下の通りです。

第21回　（2020年2月26日）変わりゆく街 釜ヶ崎
第22回　（2020年3月25日）東日本大震災・原発事故の今 9年目の極私的被災地報告―復興はなお遠く、原発事故は現在進行中
番外編　（2020年4月22日）オンライン「世直し」研究会リハーサル【オンライン開催】
第23回　（2020年5月27日）今、コロナ禍で【オンライン開催】
第24回　（2020年6月24日）「人種優劣」と植民地主義につながった自然人類学と遺骨返還問題【オンライン開催】
第25回　（2020年7月22日）「世直し」ノオト（2020年度・夏）合評会

※第1回から第20回までの研究会テーマは、Co* Design第6号から第8号に掲載の「世直し」ノオトをご覧ください。

新型ウイルスの感染拡大を鑑みて、Web会議システムを用いて初のオンライン開催を試みた第23回研究会では、「今、コロナ禍で」というテーマで話し合いました。そこで今回のノオトでは、参加者それぞれが今この状況で考えることを、言葉にすることを試みました。

「世直し研究会」と「現場力研究会」については下記URLをご参照ください。

世直し研究会：https://goo.gl/hvkRBz　　現場力研究会：https://goo.gl/cPYDEv

「世直し」ノオトのバックナンバーは下記URLよりご覧いただけます。

「世直し」ノオト（2019年度・冬）：　https://doi.org/10.18910/77265
「世直し」ノオト（2019年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/75575
「世直し」ノオト（2018年度・冬）：　https://doi.org/10.18910/73009
「世直し」ノオト（2018年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/71352

1　新型コロナ流行下のこども食堂への影響について

緊急事態宣言下におけるこども食堂の実態に関して大阪府と兵庫県の事業運営者に私たちは緊急アンケート調査をおこなった。その目的は、大阪、関西ならびに全国におけるこどもたちの生活状況を把握し、こどもたちのさまざまな諸権利が適切に守られることを願い、こどもたちが緊急事態宣言下においても、疾病流行から守られると同時に、諸権利が脅かされないように、その研究成果を、行政・大学・家族・大人に助言することにあった。本調査研究では移動や面談の制約がある中、情報収集方法を検討、郵便とインターネットアンケートを実施してこどもたちの置かれている状況について情報収集した。2020年5月21日までに大阪府と兵庫県で451団体に依頼をして65件（20%）の回答があった。

5月25日に第1回目の速報レポートをまとめて、回答者ならびに関係者に配布した。その結果、平常時はほぼすべての団体（98%）で食事を提供していたが、緊急事態宣言後は約6割の団体で食事の提供を取りやめていた。その理由には使っている場所が高齢者施設や市の施設であるため場所が封鎖されたり使えなくなったりしているからである。高齢者や地域の中での交流を促進するという目的を持ったこども食堂の存在が明らかになった。そして、平常時のこども食堂では、学習支援をおこなっておりそれができなくなったが、緊急事態宣言後は、課題を配布し添削指導をおこなっているところもあった。

論点をまとめよう。これまでの国や行政が果たすべき貧困世帯へのサービスの不足が根本的な問題としてあること。支援活動を行っているこども食堂そのものへの理解や認知も不足している。例えば、学校や教育委員会との連携を図ることができない、そのために支援が必要なこどもたちを把握できていない、支援を届けることができない、といった問題を抱えている団体が多くあった。新型コロナ流行のような非常時においてその負の影響が顕著にでてしまっていると言える。アンケートの回答には、ネグレクトや虐待を受けているこどもたちもいるのに、安否確認ができない、こどもだけでなく、親たちが大きなストレスを抱えている、また孤立している、といった心配の声が多く挙げられていた。

これらのことから、貧困問題を包括的に取り組む必要性が明らかになった。「国や行政」への要望として、こども食堂への運営費の補助・支援や、運営に関する対応策（特に責任の所在や指針）の明示に関しても意見があった。今回の調査結果を政府や行政にきちんと伝えることが、アンケートに答えてくださった運営者の想いであると同時に、それを正確に伝えることが私たち調査者の使命であることが認識できた。関係者に謝意を表したい。

-上須道徳・池田光穂・松本みなみ・中井知佳（2020）「新型コロナウイルス緊急事態宣言下のこども食堂とこどもたちへの影響についてアンケート結果の経過報告」https://bit.ly/3fFsqLk（パスワード: yseYbYCX8aj3）

（池田光穂）

2 はじめてのオンライン授業

コロナ禍で多くの学校がインターネットによる遠隔授業を導入し、異例の対応に追われた。毎日新聞が全国66大学の教員111人に実施したアンケート（同紙オンライン版、2020年5月9日）によれば、従来大教室でしていた講義は、教員が動画を作成して学生が自由に見る「オンデマンド型」が目立った。しかし教員も学生も経験の少ない授業に対して、「教員がユーチューバーになれるわけもない」「5倍は準備に時間がかかる」「過労死しかねない」「自宅に仕事部屋がなく、家族もいる中での講義は難しい」との声が上がった。一方で、演習などはZoomなどWeb会議システムを使った「リアルタイム型」が目立つ。ただし「（サーバーの容量上学生側の画像を映せず）彼らのまぶたが（寝ていて）閉じていてもまったくわかりません」「ほぼ自習と一緒」と、教育効果に疑問も聞かれる。私も3カ月オンライン授業を続けてきたが、「過労死」という言葉は他人ごとと思えず、布団で眠った日が数えるほどしかない。自分なりに試行錯誤を重ねて作った動画も、視聴率は50%程度のことがある。

オンライン授業の導入から3カ月、その光と影が見え始めた。『ウェークアップ!プラス』（読売テレビ、7月11日放送）で、2000人の教育関係者をオンラインでつなぎ「教育コロナ会議」を開く桐蔭学園理事の溝上慎一氏（教育学）はメリットとして、不登校などいろんな状況に置かれた子どもが学んでいけることや、学びの早い子どもが遅い子どもと同じ空間と時間で共に過ごす必要がなくなることを上げた。しかし成績が中位から上位の子どもは映像を見て学習している様子が試験や質問から見受けられる一方で、「オンラインは成績の中以下の子どもたちは拾っていない」という。彼らが対面授業の中でどうやって学びを続けていたかというと、個別の先生が声をかけ、時には叱るといった、生身の関わりの中で展開してきたのである。また、自宅の学習環境の差が学力差に直結しうる懸念も示された。オンライン授業の導入によって、そうした対面授業が支えてきた部分が逆に浮き彫りにされた。

リアルタイム型授業でも、学生は様々な理由からカメラをオフにしており、反応を読み取ることが叶わず、私も並ぶ黒い画面に向かって話しかけている。学生は自分が話す時だけマイクをオンにする。すると、いろんな音が聞こえてくる。鳥や犬の鳴き声、料理する音、子どもを叱る母親の声、電車の音。耳を澄まし、「今日はノドが辛そうだね」などと問う。学生が住む地域の天気予報も見るようになり、大雨が続けば雨音が気にかかり、「被害は出ていない?」と声をかける。彼らとつながることができる、私にとって大切な時間だ。

先日、授業について匿名アンケートを行った。すると学生のほうが大きなストレスを受けているだろうに、「オンライン授業になってしまい大変な中、毎回丁寧な講義動画とレジュメで対応して下さりありがとうございました」と思いやってくれたり、「とても楽しく興味深い講義で、リアルタイム配信も一度は受けてみたいという気持ちです」と、よりライブに近い授業を望んでくれたりした。ありがとう、これくらいのことしか出来なくてごめんねと、目頭が熱くなった。やはり近くで思いきり愛情を注げる生の授業がありがたいけれど、今はやるしかない。

（岡野彩子）

3　平熱か三度確かめいざ出陣ケア現場の「三密」越えて

今も地球規模で猛威を振るっているCOVID-19は新型ゆえ未知でエビデンスがないと聞く。しかし、医療は常に未知なるものとの闘いだった筈だ。一般的なインフルエンザやSARS（重症急性呼吸器症候群）MERS（中東呼吸器症候群）とこのCOVID-19は全く異なるか、似ているところはないのか。使えるものがある筈だ。見えないウイルスに医療者も怯えながらこの緊急・重要課題に対応すべく現場は奮闘している。私はせめて彼らの後方支援をしたかったが「高齢者は蟄居、じっとしているのが一番の社会貢献です」とたしなめられてしまった。そこで、私の流儀で奮戦中の後輩たちに陣中コロナ見舞いと称し、美しい写真やエールのことばを添えたハガキや手紙、メールを送った。そのやりとりから数例を紹介する。

小規模病院に勤務する30代のＡさんは未知なるものへの不安を口にする。頑張るつもりだけど自信がない、何をどう勉強すればいいのか教えて欲しい。部長は私たちのボラリスだから、取り敢えず、「ナンクルナイサー!」の声を聞きたいと。ウイルスの特徴からSARSのガイドラインを参考に吟味し、感染委員会メンバーと活かせるものを考える。近隣病院にも声をかけて情報交換しよう。怖いと言ってもいいのよ。正しく怖がろう、と話し参考資料を送った。

関東圏で働く40代のＢさんから、聴いてくださいよ、から始まる23時台のメール。怒りや哀しみが伝わってくる。この3月に推されて主任にされたばかりだ。COVID-19患者受け入れにあたり後方支援として病棟から応援を出し、何とか調整したが、夜勤数も増えオーバーワークが続いている。PPE（感染症対策のための個人防護具の総称）の確保や作成のため4月度の休日はほとんどなかった。感染者対応のナースは自宅へ戻っていない。上司の看護師長に「この使命感を強要された〈過剰適応〉はスタッフの志気を保ちにくい」と相談したが、何のための主任なのかと厳しく叱責された。4月昇給はなかった。試行期間につき役職手当も未だない。おまけにボーナスも危ういとの噂に心底萎える。報われないのはいつもで仕方ないけれど「なんだかなぁ」と。私はＢさんへの言葉を見つけられずにいる。

400床以上を有する総合病院で指揮を執る副看護部長のＣさんは50代半ば。COVID-19対応のため、急遽、空き病棟を感染対応病棟として開棟。一般病棟から応援を募り、可能な感染対策を講じてスタートした。スタッフは必要を理解していても十分な知識・経験がないこと、家族に対する院外からの声などに不安感と不信感で、通常時には何でもないことに過敏となり、関係性がギクシャクするといったことも起こった。管理者は学んだ通り、日常的に憂慮と焦慮を遮断して「有事」を想定して行動計画を立て指示をするのが仕事だ。病院理念や自分の「軸（是）」として判断したものはこの状況下において倫理的と言えるかと、問いを立てるＣさんに深く頷く。

（上條美代子）

4 「コロナで新時代」だってぇ ?!

コロナ禍に対して、人々が社会・芸術活動に知恵を絞っているのは素晴らしいことだが、一方で世の中が「根本的に変わった」とか「ニューノーマル」などと素朴に浮かれているだけではいけないだろう。情報通信技術で人的交流が広がり多くの人がそれを受け入れたからと言って「革命」などというものではなく、道具が新しく、より便利になっただけという過不足ない認識が必要だ。「世の中変わった」という物言いが主に経済・消費活動を基盤にした社会活動を念頭に置いていることを考えれば、根本は何も変わっていない。社会の底辺で生活する人々は相変わらず貧困のままに置かれているし、コロナ禍で失業にさえ追いやられた。ホームレスなら10万円の特別給付金受給も危うい。

医療崩壊で人工呼吸器が不足すれば、持病のある高齢者が「若い人に譲る」といったことが「美談」にされ、これは「役に立たないもの」を振るい落とすというこの社会全体に流れる優生思想の考え方につながるようにも見える。現に「コロナ・トリアージ」として助けるいのちの選別が行われている。このような効率重視の資本主義社会の根幹は揺るがない。コロナ禍で目先の「変化」に右往左往する人々を消費に追い込んで儲けた企業だって、その資本主義経済の盤石な基盤の上で安泰なのだが、「変わった」が主要にオンラインとか情報技術の文脈で言われることにも陥穽がある。

政権が「テレワークによる働き方改革」などとふざけたことを言っても、それは働く人々に広く利益になってはいないし、テレワークで膨大に仕事が増え苦しむ人も多い。ITの便利さと危うさをきちんと認識することが必要で、健康や感染の有無などという究極の個人情報が国家レベルで管理・監視される恐れもあり、そんな情報によって差別や排除が広がる危険は現実のものとなっている。

「便利」と言えば、「濃厚接触」が記録され感染情報が相手方に自動送信されるスマホのアプリ。注目すべきはこのシステムが厳密には人間同士の触れ合いではなく、その人が持っているはずのスマホ同士の接触を認識するという点。つまりITのシステムでは、人間そのものではなくその人に関するデジタル情報とそれを収納するスマホなどの装置が「人格」の代理をするということが興味深い。

突き詰めれば生身の人間が不在でもいいわけだが、“コロナ自粛”でレストランが導入したシステムでは、入店するとITが空席に案内し、客は電子メニューからスマホで注文と代金決済をする。そこで料理を店員が持って来るのだが、今後はベルトコンベアが運ぶようになるかも知れない。店に入る意味は単純に「料理を食べる」ということだけになる。こんな店に行きたいと思うか。これは本来複雑な人間の目的的行為を単純化し単一の目的にしか対応しない発想だが、機械化とは概ねそうだ。銀行のATMも産業ロボットも自動販売機も。あの忌々しい「ナビダイヤル」もその最たるものだ。

付き合うのが鬱陶しい他者は不要だが、頭が1と0とで出来たこの単純発想ですべて満足か?　技術はあくまで手段・道具であり、事の本質まで変化したかのようには諸手を挙げて拝跪しない方がいい。社会の格差を拡大あるいは隠蔽し、矛盾を増大させる面もあることに注視したい。

（北村敏泰）

5　命の価値　（後期高齢者のつぶやき）

コロナ禍の最中、目を疑うようなニュースを読んだ。

一つはれいわ新選組の公認候補が「高齢者を長生きさせなくてはいけないという政策をとっていると若者たちの時間の使い方の問題になる」などと主張。「命、選別しないと駄目だと思う。その選択が政治。選択するんであればもちろん高齢の方から逝ってもらうしかない」（朝日新聞DIGITAL、2020年7月9日）などと述べた。これについてトリアージを引き合いにして容認する意見もある。多くの負傷者重症者がいる中で、救命できる数は限られている。誰を救うか選ばざるを得ない。これがトリアージで大災害時などに突き付けられ問題である。救命側の人間は苦渋の選択をする。涙を流して「お父さんの命は諦めてください」と医師が言う。コロナ禍のイタリアなどで実際にあったという。

しかし、トリアージと命の選別を政治がするというのは全く違う次元である。人の命をあらかじめ年令でわけ、救われるべき命とそうでない命を分けるというのは、人の命に価値をつける論理である。これが肯定されれば障害を持つ人と持たない人との命の選別も、自国民と他国民の命の選別も当然ということになる。「ナチス」の論理の採用である。「政治が行う」というのはそういうことなのである。

今一つは命を譲るカードのニュースである。大阪大学招へい教授で医師の石蔵文信氏が「『高齢者が万が一の時、高度医療を若者に譲るという意志』を示すことができる『譲カード』を作成しました」（Yahoo!ニュース、2020年5月11日）と発表した。このカードの普及を図ろうという動きも起きているという。これは「善意」から出たものだそうだ。確かに、もし自分がコロナに感染し、若い人に高度医療を譲るかどうか聞かれたら「譲ります」というかもしれない。しかし、それをカードにして普及させていこうということは高齢者に「自死」を勧める運動と同じである。日本のように同調圧力の強い世界ではこのようなカードが流行れば、多くの高齢者は心ならずもサインし「コロナにかかったら死ぬしかない」ということになる。かつて若者が特攻隊に志願せざるを得なかったように。

二つのニュースの背景にあるのは、経済的価値を生み出さない高齢者＝多くの診察券を持ち、数種の薬を飲み、働きもせず、食べてばかりの私自身＝社会のお荷物は、「若者に席を譲れ」という声である。高齢者施設は河川敷近くに作られることが多いという。万一の場合真っ先に犠牲になる場所に…。

今は、政権が推進してきた保健所の縮小や病院の再編・統廃合が医療不足を生んでいるという事実に目を向け、「公衆衛生・医療の充実こそが政治の役割」だという声を大きく上げるべき時である。経済最優先の政権にとって都合の良い「命の選択」論議などをしている場合ではない。

（熊野以素）

6　柔らかく耐えること　～コロナウィルスと祈りと音楽～

2020年々頭から世界中の人びとは新型コロナウィルス（以下、コロナ）に玩弄され、生活の様相がすっかり変化してしまった。

コロナのニュースを初めて知った日には、レッスン室でベートーヴェンの『悲愴』を弾き、涙を流した。その後、しばらく対面レッスンをしていたが、その際も『悲愴』Grave部分を弾き聞かせていた。武漢で亡くなった方、苦しむ方を思い、パンデミックになることを想像した。Graveの序奏部分の激しいハ短調の主和音を叩きつけるように弾き始め、左手のトレモロに合わせて右手でメロディーをのせていく。どこにぶつけたら良いのかわからない、悲しみをピアノで表現したかったのかもしれない。

しかし、やがてコロナが世界中に広まり、春先に我が身にも緊密な状態となって来ると、なぜだか柔らかな気持ちになってきた。カトリック信者である私にとって大きな支えとなったのは、日本カトリック司教協議会が、「新型コロナウィルス感染症に苦しむ世界のための祈り」を提示したことであった。それによって、教会へ行かなくとも、日々この祈りを聖母マリア様へ繰り返すことで、世俗世界の私たちは不自由で恐怖の毎日を耐えることを受け入れることができるようになったのである。

もう一つの理由に、音楽教室の生徒たちの多くがZOOMなどを使い、レッスンを継続してくれたことにある。レッスンも休講になると思っていたが、このように辛苦の世の中にあり、音楽を希求していたことを共有できる生徒や演奏者たちから励みをもらった。その頃には、もう『悲愴』を弾くことはなく、ルイ15世の宮廷作曲家に任命されたJ-Ph.ラモーの「やさしい嘆き」を弾くようになっていた。

「やさしい嘆き」は、『悲愴』よりもおよそ100年前にフランスにて作曲され、ニ短調の二つの副主題をもち、美しい装飾音に彩られた、題名のとおり、平穏で心に響く作品であり、小鳥のさえずりや遠くにある馬車の音などが聞こえてくるような、自然の優美さを表現した音楽である。ベートーヴェンが聴覚を喪失する苦しみに苛まれているとき書かれた『悲愴』を弾くことが、コロナ禍にある私たちの支えになるとは思えなくなっていた。コロナは恐怖だが、「やさしい嘆き」のように柔らかく、日々耐えることで、世界中の人びととつながりながら、リモートでありながらも祈りを深め、音楽を享受し、演奏することで世直しに関わっていきたい。

（滝奈々子）

7 アマビエは笑う

「アマビエ」とは疫病の流行を予言すると共に、自身の姿の写しを人々に見せるよう告げて海中へ去った、江戸時代に出現した妖怪である（京都大学附属図書館所蔵『肥後国海中の怪（アマビエの図）』（翻刻））。新型コロナウイルス感染拡大がこのアマビエに注目を集める機会となり、加えて情報化社会を生きる中で、日々得られる膨大な情報が感染拡大を意識する導火線となったと言える。ウェブ情報には感染者数の増加、行政による感染防止への取り組み、マスクの品薄と高騰などが含まれ、さらにこれらの情報を基にした個人意見の増加は事態の緊迫さを形成するに至った。

一方では、感染拡大に便乗した虚偽情報の流布という迷惑行為も例外ではなかった。「緊急事態宣言」発令による自粛生活以降、小売店へ行けば虚偽情報の影響により大量のトイレットペーパーが買い占められており、単に購入したかっただけの私は驚いたが、対応に苦慮している店員の姿を見て同情を覚えずにはいられなかった。私は学生時代にメディア・リテラシーとクリティカル・シンキングを学んだこと、そして情報環境に身を置いていたことから、自然と情報を吟味する習慣が身に付いていたことが幸いしたのか、この虚偽情報に左右されて行動することはなかった。

今回の状況を踏まえて、誰しもが情報を容易に入手する環境にいると言える。しかし、その環境に身を置きながらも情報を吟味する行為を怠っていることが目立った。情報化社会は私たちに虚偽情報と対峙する義務を課したように見えるが、不特定多数の人々が情報を容易に入手して際限なく発信できる限り、現状改善には至らず、守られない標語とそう変わりないと言えよう。人間を介して跳梁跋扈した虚偽情報は増殖するウイルスと同等の存在となり、嫌悪感と不快感を抱かせるに十分であった。

新型コロナウイルスは、おびただしい感染者と死者を増やし続けている背後に、人間の浅ましい心理と歪んだ部分を炙り出す機会をも同時に与えた皮肉な存在と言える。後世の人々は疫病が流行る度に、令和時代の人々の行動へ注目するはずである。後世の社会が現在と何も変わっていなければ、アマビエは再び話題に上るであろう。もしかすると、アマビエは実際に姿を現す可能性も考えられる。その時、アマビエは一体何を思い、何を伝えるのであろうか。時代が変わっても進歩していない人間の愚かさを嘆きながらも笑い、懐の深さを示してくれることを望みたい。

最後に、世界中で新型コロナウイルス感染症とその後遺症に苦しむ患者の方々、闘病の末に亡くなられた患者とその死を悲しむ方々、そして医療現場の最前線で戦い続けている方々に最大の敬意と哀悼の意を表したい。

百鬼夜行から水木しげる『ゲゲゲの鬼太郎』まで、日本人の歴史は妖怪と共にあった。今回紹介する「アマビエ」もコロナ禍と共に注目されている妖怪である。その姿を写した図が京都大学附属図書館に所蔵・公開されている。本図を基に「アマビエの全体像」を作成して次頁に添えた。

出典:京都大学附属図書館所蔵『肥後国海中の怪(アマビエの図)』

アマビエの全体像

- 全体的に人魚に近い姿
- 上半身を覆う鱗
- 体全体を覆う頭髪
- 特徴的な目
- 尖ったくちばし
- 腕部に相当する部位はない
- 三又に分かれた脚部(ヒレ)
- 三又に分かれた足部(ヒレ)

本図の右側部分では、アマビエを次のように説明している(同図翻刻を基に現代語訳)

肥後国(熊本県)の海中に毎晩、光る物が出る。そこの役人が行って見たところ、図のような者が現れた。「私は、海中に住むアマビエという者である。今年から6年間、諸国は豊作となる。しかし、病が流行るので早々に私の写しを人々に見せなさい。」と言って、海中へ入った。

アマビエが現れる前に現れていた光は、目撃していた人々に不可思議さと清浄な印象を与えていたのであろう。その光に加えて、アマビエ自身も豊作の具体的期間と疫病の予言という貴重な報せをもたらしたことから、ありがたい妖怪とみなされて、その姿と言葉は記録するだけの価値があったことをうかがわせる。

アマビエはその姿形から水に深く関わる妖怪のようであるが、陸地に関する予言のみを残して去ったことも興味深い。その姿を現すまでに海水を通して、あるいは海の生き物たちがもたらす報せから、人間では判らない陸地の変化をいち早く察知出来たのではないか、そのような物語を想像させられる。今後も、アマビエのような妖怪が社会状況の変化に応じて再発見されることに期待したい。

引用文献

京都大学附属図書館所蔵『肥後国海中の怪(アマビエの図)』および同図翻刻
京都大学貴重資料デジタルアーカイブ(「新聞文庫・絵」)
https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000122(2020年7月22日閲覧)

(日髙悠登)

(投稿日:2020年7月31日)
(受理日:2020年12月7日)